

歴博 くらしの植物苑だより

第93回くらしの植物苑観察会 9月23日(土)

柿の民俗 常光徹(国立歴史民俗博物館民俗研究系)



子どものころ家の裏手に大きな柿の木があつて、秋になると祖母とよく取りにいった。V形に割った竹の先端に柿の小枝をはさんで振じり取るのだが、籠はすぐ一杯になった。取ってきた柿は祖母が一つ一つ皮をむき、細く絞った縄につけて軒下に吊るした。だんだん甘くなってくるとついつい誘惑に負けて、

白い粉がふく前に口に入れて怒られたものである。また、夕方、よごれた手足のまま家の中に入ると、「黒い足をして、柿の木に養子に來いとされるぞ」などといわれた。今思うと、黒くてカサカサした柿の表皮にうまくたとえたものだと感心する。

今でも憶えているのは「柿の木には登るな。落ちると死ぬ」と注意されたことだ。この俗信の分布は全国的らしい。新潟県山古志村を調査したときには、古老から、柿の木から落ちたらその木はすぐに伐り倒すと聞いた。枝が折れやすいこともあるのだろうが、それだけではないらしい。奈良県吉野地方では、嫁入りのときに柿の苗を持参し、死んだときにそれを火葬の薪にしたという。高知県津野町では「死人の正月」といって十二月最初の巳の日に、その年に亡くなった人の墓前に柿の木の門松を立てて餅を後ろ手で引っ張り合う習俗が伝えられている。この木には、死や他界のイメージが色濃く漂っていて、柿はこの世とあの世をむすぶ境界の木と看做されてきた。木から落ちると死ぬと聞いて恐れるのは、落ちれば死の世界にいくと考えられたためのようだ。

「柿の実はずんぶん取らずに一つ残すもの」ともいう。これをキモリ(木守り)などといい、キモリがだれかに盗まれると翌年豊作になると伝えている土地もある。神からの恵みであるなり物は、すべて取り尽くさずにその一部を神のもとに返すことで、神はそれを元手にふたたび人間に豊穰をもたらしてくれると信じられてきた。

小正月の成木責めの行事も柿の木が多い。二人の男が柿の木のもとに行き、一人が「なるか、ならぬか、ならぬと伐るぞ」と言って、鉈で木に少し傷をつけておどすと、もう一人が「なります。なります」と答える。「それならカユをあげましょう」と言って、小豆粥を傷口にかける。昔話の「猿蟹合戦」では、柿の種を植えた蟹が「早く芽を出せ柿の種、出さぬと鉄でちょんぎるぞ」などといっておどす場面が語られるが、これは成木責めの行事が話に取り込まれたのであろう。

参考文献

今井敬潤『柿の民俗誌―柿と柿渋―』一九九〇年 初芝文庫

飯島吉晴『竈神と廁神―異界と此の世の境―』一九八六年 人文書院

次回予告

○第9 4回くらしの植物苑観察会

1 1月25日(土)「針葉樹のはなし」 斎木 健一(千葉県立中央博物館)

1 3:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要 要入苑料

○第10回日本の植物文化を語る

1 10月28日(土)「栗の文化・漆の文化―アジアの中の縄文文化―」 山田 昌久

(首都大学東京)

1 3:30~15:30(予定) 本館講堂 申込不要 聴講無料